

令和 4 年 5 月 11 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02555

研究課題名(和文) ウィリアム・フォークナーの作品における住まいと暮らしに関する研究

研究課題名(英文) A Study of Housing and Living in William Faulkner's Works

研究代表者

島貫 香代子 (SHIMANUKI, Kayoko)

関西学院大学・商学部・准教授

研究者番号：30724893

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：ウィリアム・フォークナーのバリ時代、「あの夕陽」、『八月の光』、『標識塔』、『野性の棕櫚』、『征服されざる人々』、『シャーウッド・アンダーソンと他の有名なクレオールたち』、そしてナサニエル・ホーソンの『七破風の屋敷』における住まいと暮らしに関する資料収集・現地調査(ニューオーリンズ)・研究発表・論文執筆を行った。こうした考察の過程で、場所論を人種・民族問題に結び付けて論じることが増え、テーマが広がったことで、最終的に当初の研究計画よりも有意義な成果を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フォークナー研究において人種・民族問題は重要な研究テーマの一つであるが、住まいと暮らしの議論と人種差別・隔離政策としてのジム・クローを組み合わせた研究はあまり例を見ないため、こうした内容の考察に取り組んだ本研究は学術的意義が高いと思われる。ブラック・ライヴズ・マターで黒人の存在意義が問われるなど、現代のアメリカにおいても、人種・民族問題は避けては通れないテーマであるため、本研究は社会的意義も高いと思われる。

研究成果の概要(英文)：I conducted literature search, literature review, and field surveys in New Orleans, and presented and wrote papers on William Faulkner's experiences in Paris, "That Evening Sun," Light in August, Pylon, The Wild Palms, The Unvanquished, and Sherwood Anderson and Other Famous Creoles. I also presented and wrote a paper on Nathaniel Hawthorne's The House of the Seven Gables. In the course of these research, I began to link my study of sense of place to the issues of race and ethnicity. The expanded theme ultimately allowed me to achieve more meaningful results than I had originally planned for my research.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 ウィリアム・フォークナー ナサニエル・ホーソン American Literature William Faulkner Nathaniel Hawthorne

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

フォークナーが常日頃から住まいに強い関心を抱いていたこと、そして彼が当時の人々の暮らしに寄り添った作品を描いていたことを、研究代表者は、前回の科研費助成金(若手研究 B「ウィリアム・フォークナーの作品における系譜とアイデンティティに関する研究」平成 26～27 年度)の研究成果で明らかにした。本研究は、こうした研究代表者のこれまでの成果を「住まい」という場所とそこで展開される「暮らし」に焦点を当てて深化させた発展的な研究として計画されたものである。

従来のウィリアム・フォークナー研究の多くは「場所」よりも主としてアメリカ南部という「地理学的空間」や「環境」を重視し、特定の舞台が作品や登場人物の理解にどのような文学的效果をもたらしているかという観点から論じられたものではなかった。フォークナー作品の場所性に関する体系的な考察は必ずしも十分に行われてきたとは言えないため、研究開始当初はフォークナー作品における建築的空間を中心に考察することを試みた。

2. 研究の目的

研究開始当初の最終的な目的は、ニューオーリンズを舞台にした作品を通してフォークナー世界の広がりや再確認し、彼の文学的想像力と現実把握力の関係性を精査すること、1930 年代までのフォークナー作品に登場する様々な建築物の存在意義を検証し、近代化とともに用途分化した多くの種類の建築物が作品の中でどのような役割を果たしているかを考察することであった。

3 年間という限られた時間の中ですべてのフォークナー作品に言及することは難しいため、本研究では前期から中期までの作品における建築的空間に注目して考察することを目指した。フォークナー作品でしばしば重要な役割を果たすニューオーリンズの建築表象を具体的に検証した研究は多くないので、本研究ではこの地域の場所性にまず焦点を当てて考察を進めた。作品としては『標識塔』や『野性の棕櫚』を中心に取り上げ、この大都市における仮住まいについて論じることを試みた。フォークナー作品では比較的論じられることの少ない非ヨクナパトーフア作品を扱うことで、フォークナー世界の広がりや再確認し、彼の文学的想像力と現実把握力の関係性を精査することが本研究期間で明らかにしたい目的の一つであった。

本研究のもう一つの目的は、フォークナー作品に登場する様々な建築物を再考することにある。『アブサロム・アブサロム!』や『行け、モーセ』などで重要な役割を果たす農園/農園文化については多くの研究者が南部の歴史とともに考察を重ねてきたが、それ以外の建築物や設備への言及はこれまでほとんど見られなかった。そこで本研究では、近代化とともに用途分化した様々な種類の建築物がフォークナー作品のなかでどのように意義ある場所として描写されているかを検証する。

さらに、フォークナー作品の場所性に関する体系的な考察は、19 世紀末から急速に全米で適用されるようになったジム・クロー(白人と有色人種[主に黒人]の線引きを行うための人種差別・隔離政策)との関連性で必ずしも十分に行われてきたとは言えない。そこで本研究では、研究開始当初は目的としていなかったが、1920 年代から 1930 年代までの作品を通して、フォークナーの故郷であるミシシッピ州オクスフォードをモデルに構築した架空世界ヨクナパトーフアにおけるジム・クローの影響を考察する。アメリカ南部を中心とする作品舞台が物語展開や登場人物に及ぼしている影響を、ジム・クローをはじめとする人種の観点から再考することで、フォークナー作品の現実性と虚構性の狭間にある場所性の意義と課題を問い直し、検証することを、研究開始後に新たな目的として設定した。

3. 研究の方法

本研究においては、これまで研究代表者が取り上げたことのないフォークナー作品における建築的空間を中心に考察を深めていく計画を立てた。1 年目と 2 年目では、資料収集と文献精査を定期的かつ継続的に行うと同時に、ルイジアナ州ニューオーリンズおよびミシシッピ州北部において現地調査を行った。3 年目はニューヨークにおけるフォークナーの足跡をたどり、1930 年代前半のフォークナーの人種意識を探る予定であったが、2020 年 3 月に急速に世界的に広がった新型コロナウイルスの影響で、米国への渡航が制限されたため、3 年目以降の現地調査は中止となった。国内の移動も困難であったため、最後の 2 年間は資料収集と文献の精査を中心に行った。

当初は 3 年間の研究期間を予定していたが、コロナ禍で 2 年延長することになった(合計 5 年間)。各年度に行った現地調査と資料収集で得られた知見については、論文のかたちにとりまとめ、所属学会の学会誌または所属大学の紀要で発表した。論文を作成するにあたって口頭発表を行うこともあった。コロナ禍で学会がオンライン開催となったが、特に支障はなかった。

4. 研究成果

本研究期間を通してフォークナー作品とアメリカ文学・文化関連の文献を継続的に収集・精査し、知見を広げるように努力した。特にフォークナーに関する先行研究の調査・分析に多くの時間を費やすことで、自らの問題関心を深めたり、最新の研究動向をつかんだりした。資料収集を通して、フォークナー以外の作家、アメリカ南部以外の場所、20世紀前半以外の時代にも目を配り、広い視野を持つことができた。映画や演劇といった文学の隣接分野からも大きな示唆を得た。これらの継続的な研究活動は、以下の具体的な研究成果に大なり小なり寄与している。

初年度(2017年度)は、ウィリアム・フォークナーの『八月の光』、『野性の棕櫚』、『征服されざる人々』、『シャーウッド・アンダソンと他の有名なクレオールたち』における住まいと暮らしに関する資料収集と考察を行った。2017年8月から9月にかけてミシシッピ州とルイジアナ州で現地調査を行い、上記の作品に加えて、フォークナーの非ヨクナパトーフア作品全般に関する新たな着想を得た。2017年11月に日本アメリカ文学会関西支部例会で研究発表「現実の中に事実を見出す *Sherwood Anderson and Other Famous Creoles* における Faulkner のノンフィクション・パロディ」、2018年3月に関西フォークナー研究会で「現地報告『エルサレムよ、我もし汝を忘れなば』の舞台を訪ねて ミシシッピ・ルイジアナ編」をそれぞれ行った。研究論文「Dark Houses and a Sanctuary: Joe Christmas's Struggles with Home in *Light in August*」が関西学院大学言語教育研究センター紀要『言語と文化』に掲載された(2018年3月)。また、2018年4月発行の日本ウィリアム・フォークナー協会の機関誌『フォークナー』の書評(Taylor Hagood 著、*Following Faulkner: The Critical Response to Yoknapatawpha's Architect*)で、アメリカにおけるフォークナー批評の全体像をとらえる機会をいただき、多くの示唆を得た。アメリカ文学・文化や南部ルネサンスといった大きな枠組みのなかでフォークナー作品の意義についても再考することができた。さらに、アメリカ文学作品の精読と多読を比較し、それぞれのアプローチの意義を検討する研究会を共同研究者とともに定期的に行い、それぞれの研究成果を一冊の論文集にまとめる計画を立てた。

2年目(2018年度)は、ウィリアム・フォークナーの『標識塔』、『野性の棕櫚』、『征服されざる人々』、『シャーウッド・アンダソンと他の有名なクレオールたち』における住まいと暮らしに関する資料収集・現地調査・研究発表・論文執筆を行った。2018年9月には日本ウィリアム・フォークナー協会全国大会にて研究発表「『野性の棕櫚』における異文化表象 ポーランド系移民とケイジャンを中心に」を行った。2018年10月に出版された共著『ノンフィクションの英米文学』(富士川義之編、金星堂)に、2017年度から2018年度にかけて執筆・修正した論文「エリザベス・アンダソンと他の有名なクレオールたち フォークナーとスプラトリングとの友情を中心に」が掲載された。2019年2月から3月にかけてルイジアナ州ニューオーリンズ近辺で資料収集・現地調査を行い、『標識塔』と『野性の棕櫚』に関する考察を深めると同時に、新たな着想を得て作品理解のヒントを探ることができた。2017年度と同様、共同研究者とともにアメリカ文学作品の精読・多読を行い、これら二つのアプローチの意義を検討する研究会を開催した。こうした学会活動や共同研究を通じて、他のフォークナー研究者やアメリカ文学者とともに有意義な情報交換や意見交換を行うことができた。

3年目(2019年度)は、フォークナー作品に関する研究発表と論文執筆に力を注いだ。2019年12月に日本アメリカ文学会北海道支部のシンポジウム「他者とノを生きる アメリカ文学と人種」において研究発表「ジム・クロウ時代の南部で生きる 「あの夕陽」における人種意識の形成」を行い、他の登壇者や出席者と有意義な意見交換を行うことができた。その他の具体的な研究成果としては、研究論文「『ヴァピーナの香り』の追加 『征服されざる人々』における登場人物と作家の成長」(2019年9月、吉田恭子・竹井智子編『精読という迷宮 アメリカ文学のメタリーディング』に収録)と研究論文「古き街で生きる 『標識塔』における都市の明暗と作家の原点帰帰」(2020年3月の関西学院大学商学部紀要『商学論究』に掲載)である。また、2020年度に出版されることになる共著に掲載していただく『野性の棕櫚』に関する論文を執筆した。新型コロナウイルスの影響で、2020年3月上旬に予定していたニューヨークでの現地調査・資料収集は残念ながら中止となった。

4年目(2020年度)は、コロナ禍で国内外の出張がなくなり、学会活動が中止またはオンライン開催になる中、フォークナー作品に関する論文執筆に注力した。本研究の目的に沿うかたちで、フォークナー作品で描かれる住まいと暮らしのあり方を、人種とエスニシティの観点から考察した。具体的な研究成果は以下の通りである。2019年12月に「アメリカ文学と人種」をテーマにしたシンポジウムで口頭発表を行ったが、その内容が論文「ジム・クロウ時代の南部で生きる 「あの夕陽」における人種意識の形成」として日本アメリカ文学会北海道支部の機関誌『北海道アメリカ文学』に掲載された(発行日は2020年3月だが2020年9月に刊行された)。このシンポジウムを通じて、他のアメリカ文学者とともに有意義な情報交換や意見交換を行うことができ、視野が広がった。その他、論文「多様な人々、一様なふるまい 『野性の棕櫚』におけるジム・クロウの影響」が共著『テキストと戯れる アメリカ文学をどう読むか』(高野泰志・竹井智子編、2021年3月)に、論文「パリのアメリカ黒人 1920年代半ばのフォークナーの人種意識」が関西学院大学言語教育研究センター紀要『言語と文化』(2021年3月)に、それぞれ掲載された。また、2021年4月発行の日本ウィリアム・フォークナー協会の機関誌『フ

オークナー』の書評 (Sarah Robertson 著、*Poverty Politics: Poor Whites in Contemporary Southern Writing*) では、アメリカ南部におけるプア・ホワイトと貧困問題について学ぶ機会をいただき、多くの示唆を得た。

5年目(2021年度)は、4年目と同様、コロナ禍の影響で国内外の出張がなくなり、さまざまな学会の例会と全国大会がオンライン開催になる中、ウィリアム・フォークナーとナサニエル・ホーソーン作品比較を試み、研究発表と論文執筆を行った。2021年8月の日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部例会(オンライン開催)で「ホーソーンとフォークナーの人種意識

『七破風の屋敷』と『土にまみれた旗』を中心に」と題する口頭発表を行ったが、このうちホーソーンに関する考察が研究論文「『七破風の屋敷』におけるジム・クロウとホーソーンの人種意識」として日本ナサニエル・ホーソーン協会の機関誌『フォーラム』に掲載された(2022年3月)。これまでの研究では20世紀のアメリカ南部を中心に考察してきたが、今回のホーソーン作品の考察を通して19世紀のアメリカ北部の人種問題に取り組むことができ、研究に広がりが出てきたのは大きな収穫であった。フォークナーの発表部分は、2022年11月頃に発刊予定の関西学院大学商学部の紀要『商学論究(商学部開設70周年、商科開設110周年記念号)』に掲載される予定である(現在執筆中)。このところ取り組んでいる研究テーマはジム・クロウといった人種・民族問題だが、地域的にはフォークナーが駆け出しの頃に滞在していたフランス(特にパリ)にも注目している。

本研究ではさまざまなフォークナー作品を取り上げ、作品に登場したり、フォークナーが訪れたりした場所の住まいと暮らしのあり方について検証してきた。本研究期間の後半では、ジム・クロウの観点を取り入れながら論じることで、本研究の考察に深みが出たように思う。ジム・クロウ社会における人種/民族の共生や棲み分けの可能性と限界を論じ、フォークナー作品における住まいと暮らしを理解するうえでジム・クロウが必要不可欠なテーマであることを実感した。また、19世紀アメリカ北部のニューイングランド地方を舞台とするホーソーン作品を取り上げることで、20世紀アメリカ南部のフォークナーの世界にとらわれない視野を得ることができた。今後の研究に活かしていきたい。コロナ禍で現地調査が出来ず、研究期間の延長も余儀なくされたが、研究開始当初に考えていた以上の研究成果を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 島貫香代子	4. 巻 27
2. 論文標題 『七破風の屋敷』におけるジム・クロウとホーソーンの人種意識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フォーラム	6. 最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島貫香代子	4. 巻 36
2. 論文標題 ジム・クロウ時代の南部で生きる 「あの夕陽」における人種意識の形成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道アメリカ文学	6. 最初と最後の頁 19-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島貫香代子	4. 巻 24
2. 論文標題 パリのアメリカ黒人 1920年代半ばのフォークナーの人種意識	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語と文化	6. 最初と最後の頁 65-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島貫香代子	4. 巻 67巻4号
2. 論文標題 古き街で生きる 『標識塔』における都市の明暗と作家の原点回帰	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 商学論究	6. 最初と最後の頁 145-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kayoko Shimanuki	4. 巻 21
2. 論文標題 "Dark Houses and a Sanctuary: Joe Christmas's Struggles with Home in Light in August"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『言語と文化』	6. 最初と最後の頁 113-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 島貫香代子
2. 発表標題 ホーソンとフォークナーの人種意識 『七破風の屋敷』と『土にまみれた旗』を中心に
3. 学会等名 日本ナサニエル・ホーソン協会関西支部例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 島貫香代子
2. 発表標題 ジム・クrow時代の南部で生きる 「あの夕陽」における人種意識の形成
3. 学会等名 日本アメリカ文学会北海道支部シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島貫香代子
2. 発表標題 「『野性の棕櫚』における異文化表象 ポーランド系移民とケイジャンを中心に」
3. 学会等名 日本ウィリアム・フォークナー協会第21回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島貫香代子
2. 発表標題 「現実の中に事実を見出す Sherwood Anderson and Other Famous CreolesにおけるFaulknerのノンフィクション・パロディ」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会関西支部例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 島貫香代子
2. 発表標題 「現地報告『エルサレムよ、我もし汝を忘れなば』の舞台を訪ねて ミシシッピ・ルイジアナ編」
3. 学会等名 関西フォークナー研究会例会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 高野泰志・竹井 智子編、中西佳世子、柳楽有里、森本光、玉井潤野、吉田恭子、島貫香代子、杉森雅美、水野尚之、四方朱子、山内玲	4. 発行年 2021年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 344
3. 書名 テキストと戯れる アメリカ文学をどう読むか	

1. 著者名 吉田恭子・竹井智子編、高野泰志、中西佳世子、島貫香代子、舌津智之、杉森雅美、森慎一郎、伊藤聡子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 344
3. 書名 精読という迷宮 アメリカ文学のメタリーディング	

1. 著者名 富士川義之編、鎌田禎子、島貫香代子、平塚博子、本荘忠大、山辺省太、松井美穂、本村浩二、山内巧一郎、遠藤朋之、東雄一郎、川崎浩太郎、藤井光	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 438
3. 書名 『ノンフィクションの英米文学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

【書評】 1. Sarah Robertson, Poverty Politics: Poor Whites in Contemporary Southern Writing (『フォークナー』23号、2021年、111～114頁) 2. Taylor Hagood, Following Faulkner: The Critical Response to Yoknapatawpha's Architect (『フォークナー』20号、2018年、214～218頁)
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------